Vol.2014-CH-104 No.2
2014/10/18

ニコライ・ゴーゴリの文体に見られる精神病理

世利彰規[†1]

本稿はニコライ・ゴーゴリの書簡における文体がいつの時代に変化したのかを特定することを目的とする．そして彼の死の原因となった精神病理がいつ何をきっかけに生じたのかを明らかにする．文章の特徴として 1）一つ一つの文の長さと 2）文を構成する単語の長さの 2 つとした．これらの特徴が 1820 年から 1852 年の間にゴーゴリの書簡においてどのように変化しているか調べた結果、1847 年を境に文が長くなったという結果を得ることができた．これは『友人との往復書簡選』を出版した時期と一致した．以上をふまえてゴーゴリの精神的な病は『友人との往復書簡選』の出版後に始まったという結論が得られた．

Mental Sickness which is detected in N.V.Gogol's style

AKINORI SERI[†1]

The purpose of this paper is to clarify when N.V.Gogol's styles in his letters changed, in order to find the reason of Gogol's mental sickness. We use the length of a sentence and the length of each word in a letter as the feature of Gogol's style. We surveyed changes of these features in Gogol's letters that were written between 1820 and 1852. It became clear that from 1847 sentence length became greater in Gogol's letters. In this period, 'Selected Passages from Correspondence with his Friends' was published. As a result, we came to reach the conclusion that Gogol's mental sickness occurred after publishing 'Selected Passages from Correspondence with his Friends'.

1. はじめに

1.1 本研究の目的

本稿は 19 世紀ロシアの作家ニコライ・ゴーゴリの書簡における文章の長さと単語の長さがいつ変化したのか特定することによって、彼の狂信的な死の原因を特定することを目的とする．

また本研究はロシア文学の作家研究や文体研究などの文学研究に応用を目指している．ロシア文学における真贋判定や著者推定への応用も視野に入れている．

1.2 ゴーゴリの精神病理

ニコライ・ゴーゴリ（1809-1852）は 19 世紀ウクライナで生まれ、ロシア語で執筆活動をおこなった．代表作として「外套」「死せる魂」などがある．

19 世紀ロシアの現状をユーモアあふれる筆致で描き出したことが評価されたが、晩年に狂信的な宗教思想にとらわれて断食ののちに衰弱死するという最期を迎えた．

2. 先行研究

2.1 ロシア文学史からの先行研究

ゴーゴリの精神病理についてロシア文学研究からアプローチがなされている[1]．特にこの問題に関しては病跡学の立場から論じられることが多い．「病跡学」とは主として芸術家・文学者・学者・政治家など傑出した人物を対象とし、個人の生涯を疾病、とりわけ精神病理学的な観点から研究分析し、その活動における疾病の意義を明らかにしようとする学問である[2]．中でも代表的なものがウラジーミル・チシの病跡学の観点からの研究である[3]．チシはゴーゴリと友人との書簡を手がかりにし、プーシキンの死、遺伝的要因、滞在先の気候風土の影響など様々な要因を考慮して論を進めた．

2.2 計量文献学からの先行研究

ロシア語についての計量文献学の手法を用いて分析をおこなったものとして Kjetsaa らの「静かなドン」の著者推定に関する研究がある[4]．先行研究[4]は文の長さ、単語の長さ、どの品詞が文章のどの位置にくるか、延べ語と異なり語の頻度などの文章の特徴を用いてロシア語テキストの分析をおこなった．

本稿も先行研究[4]にならって文章を構成する単語の数と単語を構成する文字の数とを文章の特徴として分析した．

3. 問題提起

3.1 ベリンスキーの言葉

ゴーゴリの文体の変化について同時代の文学批評家ヴィッサリオン・ベリンスキーがコメントを残している．彼はゴーゴリの宗教的な回心に批判的であり、1847 年にゴーゴリ宛てに非難の手紙を送った．ゴーゴリはベリンスキーに返事の中で反論した．これはその返事を読んだときのベリンスキーの反応についての証言である[5]．

> この最後の手紙はベリンスキーを怒らせはしなかった．アンネンコフが伝えたところによると、「ベリンスキーは『友人との往復書簡』の作者に対し怒ることも個人的な憎しみを持つこともせず、彼の手紙を残念そうに読んでから次のようにつぶやいた．「なんと込み入った文章だろう！ 彼はあのときとても不幸だったに違い

* †1 東京大学大学院人文社会系研究科
University of Tokyo, Graduate School of Humanities and Sociology

ⓒ2014 Information Processing Society of Japan

ない」

このコメントから宗教思想に傾倒していたゴーゴリの文章の構造は複雑なものとなっていたと仮定できる.

3.2 本稿で扱う問題

本稿において「文章の複雑さ」は文章の長さと文章を構成する語の長さによって測ることにする.「文章の長さ」は文章を構成する単語の数、「語の長さ」は単語を構成する文字の数とする.

以上から、本稿で扱う問題は「ニコライ・ゴーゴリの書簡において文の長さおよび語の長さが大きくなったのはどの時点か」とする.

ゴーゴリの文体がいつ変化したのかがはっきり明らかになれば、その時点で起こった出来事が彼の精神的な病の原因となっていると推定することができる.

4. 作業仮説

ゴーゴリの文体において文章の長さと語の長さに変化が生じた時点として 1) プーシキンの死と 2)『死せる魂 第二部』の執筆、3)『友人との往復書簡選』出版の 2 つが考えられる.

4.1 プーシキンの死（1837 年）

アレクサンドル・セルゲイヴィッチ・プーシキン（1799-1837）は 19 世紀ロシアの詩人であり、ロシア文学の父とされる. 彼は 1837 年に決闘により死亡する. ゴーゴリは自身の才能を見いだしてくれたプーシキンを敬愛しており、文学の師と仰いでいた.『外套』の主題はプーシキンから譲られたものとされている. プーシキンの死がゴーゴリに与えた精神的な衝撃は大きいと思われ、これが、ゴーゴリが狂信的な宗教思想をもった原因の一つと考えられる. プーシキンの亡くなった 1837 年をゴーゴリの文体の変化が始まった時点であるという仮説を立てる.

4.2 『死せる魂 第二部』の執筆（1842 年前後）

1842 年頃から執筆されていた『死せる魂』はゴーゴリのライフワークであり、第二部においてゴーゴリはあるべきロシアの姿を描写しようとすることを目指していた. しかしその構想はうまくゆかず、執筆は難航しており、一旦完成した原稿も何度か焼かれたことが知られている. この『死せる魂 第二部』執筆の難航がゴーゴリの精神的な病の原因の一つとして考えられる. 1842 年をゴーゴリの文体の変化が始まった時点である候補となる.

4.3 『友人との往復書簡』出版（1847 年）

『死せる魂 第二部』の執筆がうまくゆかなかったゴーゴリは 1847 年に『友人との往復書簡選』という書物を出版する.『往復書簡』と銘打ってあるがこれにはゴーゴリの書いた手紙・論文しか載っていない. 彼の宗教的な傾倒が顕著に見られるようになったのもこの頃であるとされる. ベリンスキーがコメントしていたように、1847 年を境としてゴーゴリの文章に変化が現れたことは大いに考えられる.

5. 分析と結果

今回使用したテキストは全 14 巻のゴーゴリ著作集のうち書簡の部分の第 10 巻から第 14 巻である. 1820 年から 1852 年までに書かれた 1317 の書簡となる. 分析に際しては WWW 上にある電子テキストを使用した[6]. 文章は句点「.」「?」「!」「…」によって区切られるものを一つとして数える. 文章中の単語はスペース「¥s」によって区切られるものを一つとして数えた. 文に関しては 3 単語以上からなるものを、単語に関しては 1 文字以上からなるものを対象に数えた. ハイフン「-」でつながれたものも一単語として数えた.

先行研究[4]は 6-10 単語からなる文がテキストにおいて大きな割合を占めることに着目している[a]. また単語を構成する文字数については 3 文字および 6 文字からなる単語の使用頻度について注目している[b]. 本稿でも 6-10 単語からなる文および 3 文字および 6 文字からなる単語に着目していくことにする.

5.1 プーシキンの死（1837 年）

まずプーシキンの死の前後である 1836 年から 1839 年までを対象に文章ないで使われる単語の数と何文字からなる単語が多く用いられているかについて調べた結果について考察する.

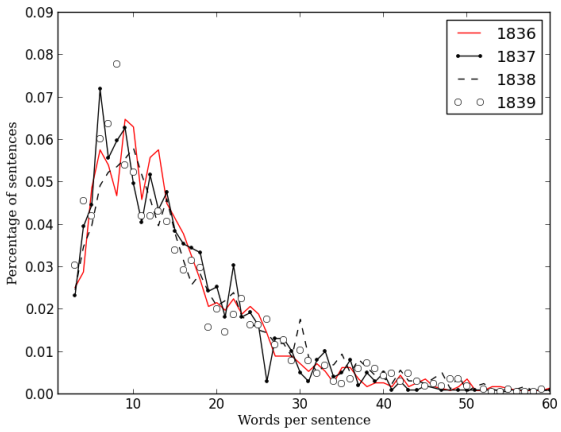

図 1 プーシキンの死の前後における
文章中の単語数の変遷（1836-1839）

横軸は 1 文を構成する単語の数を、縦軸はテキスト中（ここでは 1 年に書かれた書簡）の文の数をテキスト内の全単語の数で割ったものを単位としている.

上のグラフでは 1836 年から 1839 年の間にゴーゴリの書簡の文が何単語で構成されるかの頻度の変遷が表されている. 値はほぼ重なっており、目立った変化はないように思

[a] 文献[4] p.64.
[b] 文献[4] p.75.

ⓒ2014 Information Processing Society of Japan

われる．本当に差が見られないかどうか先行研究[4][c]にならって二標本コルモロゴフ-スミルノフ検定で確かめてみる．検定に用いるデータは次のような表で表される．f は文が何語で構成されるかの頻度、p はそれに対応する比率、p*は累積比率を表す．

表 1　1837 年における書簡内の文の長さ

	f_1	p_1	p_1*
3-5	62	0.0628166160081	0.0628166160081
6-10	291	0.294832826748	0.357649442756
11-15	230	0.233029381966	0.590678824721
16-20	164	0.166160081054	0.756838905775
21-25	110	0.111448834853	0.868287740628
26-30	55	0.0557244174265	0.924012158055
31-35	30	0.0303951367781	0.954407294833
36-40	23	0.0233029381966	0.977710233029
41-45	11	0.0111448834853	0.988855116515
46-50	4	0.00405268490375	0.992907801418
51-55	4	0.004052685	0.9969605
60-65	1	0.001013171	0.9979737
61-	2	0.00202634245187	1.0
	987	1.0	

表 2　1838 年における書簡内の文の長さ

	f_2	p_2	p_2*
3-5	94	0.0593434343434	0.0593434343434
6-10	397	0.250631313131	0.309974747475
11-15	383	0.241792929293	0.551767676768
16-20	234	0.147727272727	0.699494949495
21-25	162	0.102272727273	0.801767676768
26-30	99	0.0625	0.864267676768
31-35	72	0.0454545454545	0.909722222222
36-40	53	0.0334595959596	0.943181818182
41-45	29	0.0183080808081	0.96148989899
46-50	27	0.0170454545455	0.978535353535
51-55	11	0.00694444444444	0.98547979798
56-60	6	0.003787879	0.9892677
61-	17	0.01073232	1.0
	1584	1.0	

検定は先行研究[4]の手続きにしたがっておこなう．まず p_1*-p_2*の最大値 d_{max} とする．そしてそれぞれの標本の大きさを n_1,n_2 とする．その値から目的とする検定統計量 λ を次のような式によって求める．

$$\lambda = d_{max}\sqrt{((n_1*n_2) / (n_1+n_2))}$$

この式にしたがって 1837 年と 1838 年間のデータの検定をおこなってみると、d_{max} は 0.06652006 となる．ここから、

$$\lambda = 0.06652006*\sqrt{((1584*987) / (1584+987))}$$

$$\lambda = 1.640355$$

検定の結果として得られた検定統計量として 1.640355 という値が得られた．これは有意水準 0.01 における臨界値 1.63 よりも大きく差は有意であった．しかし検定統計量 1.640355 は臨界値 1.63 よりそれほど離れた値ではなく、目立った差ではあるとは言えない．

次に単語が何文字で構成されるかの変遷を見てみる．

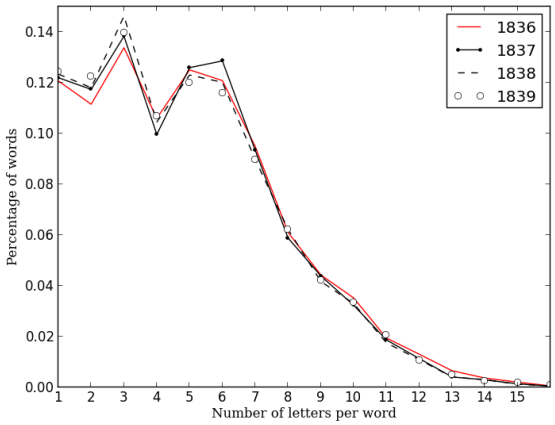

図 2　プーシキンの死の前後における
単語中の文字数の変遷（1836-1839）

上のグラフは単語の中の文字の数が年ごとにどれほど変化しているかについて表している．1837 年と 1838 年との間の値は重なっており大きな変化はない．

5.2　『死せる魂 第二部』の執筆（1842 年前後）

つぎに第二の仮説 1842 年前後における文章の長さと単語の長さの変遷について見る．まず文章の長さの変遷をグラフとして表す．

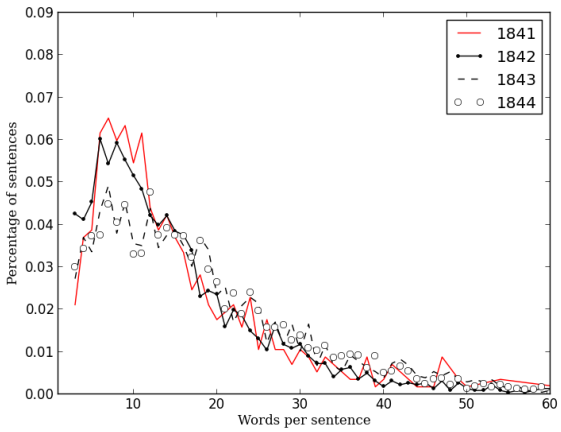

図 3 『死せる魂 第二部』の執筆の前後における
文章中の単語数の変遷（1841-1844）

[c] 文献[4] pp.66-67.

ⓒ2014 Information Processing Society of Japan

仮説とは異なって 6-10 単語のからなる文の出現頻度は 1842 年を境に減った．グラフに見られる 1842 年と 1843 年の間の減少が有意なものであるかどうか先行研究[4]にならって二標本コルモロゴフ–スミルノフ検定で確かめてみた．

表 3　1842 年における書簡内の文の長さ

	f_1	p_1	p_1*
3-5	185	0.0837862318841	0.0837862318841
6-10	606	0.274456521739	0.358242753623
11-15	495	0.224184782609	0.582427536232
16-20	348	0.157608695652	0.740036231884
21-25	205	0.0928442028986	0.832880434783
26-30	138	0.0625	0.895380434783
31-35	87	0.039402173913	0.934782608696
36-40	53	0.0240036231884	0.958786231884
41-45	27	0.0122282608696	0.971014492754
46-50	24	0.0108695652174	0.981884057971
51-55	14	0.00634057971014	0.988224637681
56-60	8	0.003623188	0.9918478
61-	18	0.008152174	1.0
	2208	1.0	

表 4　1843 年における書簡内の文の長さ

	f_2	p_2	p_2*
3-5	132	0.0642961519727	0.0642961519727
6-10	430	0.209449585972	0.273745737944
11-15	383	0.186556259133	0.460301997077
16-20	359	0.174866049683	0.635168046761
21-25	225	0.10959571359	0.744763760351
26-30	162	0.0789089137847	0.823672674135
31-35	107	0.0521188504627	0.875791524598
36-40	70	0.034096444228	0.909887968826
41-45	63	0.0306867998052	0.940574768631
46-50	46	0.0224062347784	0.96298100341
51-55	30	0.014612761812	0.977593765222
56-60	10	0.00487092060399	0.982464685826
61-	36	0.0175353141744	1.0
	2053	1.0	

検定統計量 λ は 3.983316 となり、0.01 水準のとき臨界値 1.63 よりも大きいため有意となった．したがって、上のグラフで見られる値の差は分析に使用されたテキストデータに偶然に見られたものではないということになり、ゴーゴリの文体にこの期間変化が現れたということになった．

つぎに 1 単語中に含まれる文字の数を見てみる．

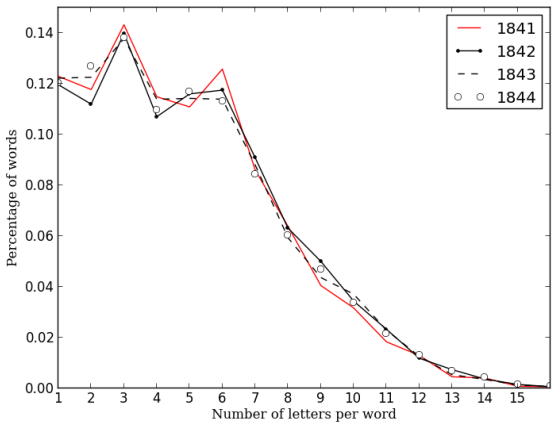

図 4　『死せる魂 第二部』の執筆の前後における単語中の文字数の変遷（1841-1844）

1837 年とその周辺と同様に、単語を構成する文字については文中の単語数とは異なり、年による大きな変動は見られない．

5.3　『友人との往復書簡』出版（1847 年）

最後に『友人との往復書簡』が出版され、これまでゴーゴリを評価していた文学評論家や友人たちから非難をうけた 1847 年前後における文と単語の変化について見た．

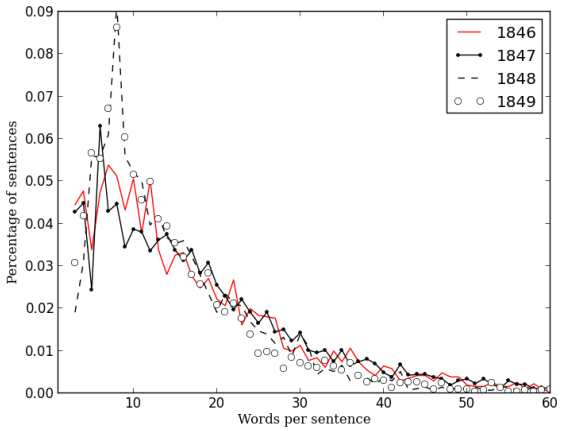

図 5　『友人との往復書簡』出版の前後における文章中の単語数の変遷（1846-1849）

1847 年を境に 8 単語からなる文のテキストにおける頻度が急増しているのが分かる．グラフには記載されていないが、この傾向は 1852 年まで続いている．前の仮説と同様に先行研究[4]にならって二標本コルモロゴフ–スミルノフ検定で 1847 年から 1848 年の間の値の差が偶然ではないことを確認する．1847 年と 1848 年の書簡内における文の長さについてのデータは次の表で表される．

ⓒ2014 Information Processing Society of Japan

表 5　1848 年における書簡内の文の長さ

	f_1	p_1	p_1*
3-5	68	0.0499632623071	0.0499632623071
6-10	436	0.320352681852	0.370315944159
11-15	300	0.220426157237	0.590742101396
16-20	211	0.155033063924	0.74577516532
21-25	138	0.101396032329	0.847171197649
26-30	85	0.0624540778839	0.909625275533
31-35	55	0.0404114621602	0.950036737693
36-40	27	0.0198383541514	0.969875091844
41-45	17	0.0124908155768	0.982365907421
46-50	8	0.00587803085966	0.988243938281
51-55	7	0.0051432770022	0.993387215283
56-60	6	0.00440852314475	0.997795738428
61-	3	0.00220426157237	1.0
	1361	1.0	

表 6　1847 年における書簡内の文の長さ

	f_2	p_2	p_2*
3-5	412	0.0875850340136	0.0875850340136
6-10	985	0.209396258503	0.296981292517
11-15	865	0.183886054422	0.480867346939
16-20	743	0.157950680272	0.638818027211
21-25	515	0.109481292517	0.748299319728
26-30	365	0.077593537415	0.825892857143
31-35	243	0.0516581632653	0.877551020408
36-40	185	0.0393282312925	0.916879251701
41-45	114	0.0242346938776	0.941113945578
46-50	78	0.0165816326531	0.957695578231
51-55	59	0.0125425170068	0.970238095238
56-60	45	0.00956632653061	0.979804421769
61-	95	0.0201955782313	1.0
	4704	1.0	

検定統計量 λ は 3.569811 となり、0.01 水準において差が有意となる臨界値 1.63 より大きかった．以上から上のグラフで見られる外見上の差は有意であると言うことができた．1847 年から 1848 年の間にゴーゴリが書簡の中での文章はより多くの単語から構成されるようになったと言える．

最後にこの期間内に単語内の文字列の数に変化があったか見る．

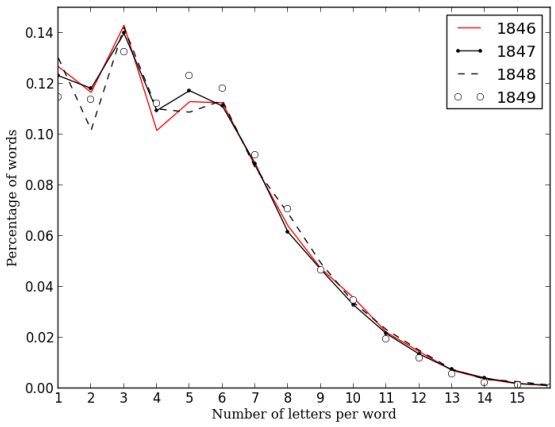

図 6　『友人との往復書簡』出版の前後における単語中の文字数の変遷（1846-1849）

これまでと同様に単語を構成する文字の数についてはグラフの数値はほぼ重なっており、大きな変化はない．

以上の 3 つの仮説から単語を構成する文字の数の比率はゴーゴリの生涯を通じてあまり大きな変化が見られないことが分かった．

6.　おわりに

本稿ではゴーゴリの書簡における文章の 1）一つ一つの文章の長さ、2）文章に使われている単語の文字数を見ていくことで彼の文体にいつ変化が起こったのかを探った．ゴーゴリの文体に大きな変化が起きた時点と彼の生涯のうちの出来事が起きた時を照らし合わせることで彼の心の変化に大きな影響を与えた出来事を特定しようと試みた．その結果、1）の文の長さの変遷にゴーゴリの心境の変化がはっきりと現れていることが明らかになった．

6.1　総括

1837 年の前後、1842 年前後および 1847 年前後いずれの期間にもゴーゴリの書簡において文の長さに変化が見られる．特に 1847 年を境に文の長さが目立って大きくなったことが分かった．これはゴーゴリの生涯において『友人との往復書簡選』を出版した時期と一致する．そのうち 1847 年を境に文の長さが長くなっている．これは『友人との往復書簡選』への非難に対してゴーゴリ自身が反論し、長い文によって弁明をおこなったためと考察できる．このことはゴーゴリの精神状態にも影響したと見られる．以上からゴーゴリの精神的な病の発生には『友人との往復書簡選』の出版が関係していることが推察される．

仮説とは異なり 1842 年を境に文の長さは短くなったが、明確な理由は分からなかった．

単語を構成する文字の数は生涯を通じて大きな変化は見られなかった．

ⓒ2014 Information Processing Society of Japan

6.2 今後の課題

今回の分析では単語を単位とした文の長さ、単語を構成する文字の数といったどの言語にも共通してみられる単純な文章の特徴を基準に文体の変化を測った．先行研究[4]では主語・述語や品詞の割合など、文章の長さ・語の長さ以外の文章の特徴も用いられている．今後はこのようなロシア語独自の特徴を用いて分析を進めていく．

今回の分析で 1842 年を境に文の長さが短くなるという結果が得られたが、このことがゴーゴリのどのような心境の変化を反映しているのか考察を進めていくことも課題として残される．

また今回は一年を単位として文の長さや単語の長さの変化を見ていったが、今後はより細かな月や週単位での変遷を見ることでより具体的にどのような出来事がゴーゴリの精神状態に影響を与えたのか探っていく必要がある．

参考文献

[1] 青山太郎 :『ニコライ・ゴーゴリ』河出書房新社. 1986.
[2] 久野康彦 :「19 世紀後半の精神医学とその発想–精神医学者ウラジーミル・チシ(1855-1922?)による文豪の生涯と作品の分析を手掛かりに–」『19 世紀ロシア文学という現在』北海道大学スラブ研究センター. vol.10, pp1-17. 2005.
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no10/01kyuno.pdf
[3] Čiž, V.: *Bolezn' Gogolja: zapiski psichiatra*. Moskow. Izdatel'stvo 'Respublika'. 2001.
[4] Kjetsaa, G. et al.: *The authorship of the Quiet Don*. Solum Forlag / Humanities Press. 1984.
[5] Sokolov, P.V.: *Gogol Enciklopedia*. Moscow. Eksmo. p.105, 2007.
[6] Gogol, N.V.: *Polnoe soblanie sočinenij v četyrinadcati tomach*. Moskow. Izdatel'stvo AN SSSR. 1940.
http://ruslit.traumlibrary.net/page/gogol.html

ⓒ2014 Information Processing Society of Japan